「平和」のアルバム

⑦

ミニ独立国の興亡

「内政」「外交」きしみも

「ミニ独立国は、国際平和を愛し、交流を深め、各国の発展を図る」

ミニ独立国の国連憲章は、こううたう。

憲章は六十一年十月、島根県の「いずもオロチ王国」でサミットが開かれたときに制定された。いま、ミニ独立国の数は、全国に百五十とも二百ともいわれている。

作家の北杜夫さんは、「マンボウマブゼ共和国」の主席を名乗る。国民は家族とお手伝いさんの四人。承認を求めて、英、米、仏などの政府に手紙を出したが返事はない。

◇

兵庫県中町の「カナソ・ハイニノ国」は、JR鍛冶屋線の廃止に反対する人たちでつくる。国名は七駅の頭文字。国民の義務は、月一回、列車に必ず乗ること。

滋賀県栗東町の「青空共和国」は、社会福祉協議会職員と障害を持つ子供たちが建国した。毎秋に、北海道の「なかしべつ・ゆう・もあ王国」から「輸入」したジャガイモを売り、益金を活動に役立てる。

◇

五年前、「トカシク共和国」が消えた。

東シナ海に浮かぶ渡嘉敷島。沖縄県那覇市から船で約一時間半かかる。

独立祭があったのは五十八年三月。旅行業者の企画に村が飛びついた。「日本最南端の共和国で、日本一早い海開き」のうたい文句に誘われ、大阪から観光客百三十人がやって来た。大統領にふんした村長が、海岸で独立を宣言した。

しかし、民宿業者は宿泊費を四割も値切られた。もうけどころか赤字が出た。「計画を知らされたのは一週間前。旅行業者と村の独走だった」（平田啓吉・民宿組合長）行政不信が残った。

その島でいま、座間味毅村長（五七）は、沖縄本島の業者に村有地を貸し、ゴルフ場やホテル、飛行場をつくるリゾート計画に政治生命をかける。計画では、島の約五分の一が開発される。

民宿業者にとって、ホテルの進出は死活問題だ。開発でサンゴ礁も破壊される。平田組合長たちと村長の対立は深い。

「共和国国民は全ての争いを排除し、隣人を愛す」――人口七百人、過疎と高齢化が進む、かつてのトカシク共和国の平和憲法の一節である。

◇

三月、秋田県西仙北町の「秋田カエル村」で開かれた国連サミットは、「国勢調査」を行うことを決議した。

五月、国勢調査が行われた。これまで独立を宣言した約百六十カ国に、元首名、連絡先、国連加盟の意思など、八項目のアンケートを出した。

回答があったのは四十六カ国だけ。もう消えてしまった国もあったが、「自由を求めて独立したのに、なぜ国連をつくるのか」という反発もあった。

農水省所管の財団法人、農政調査委員会理事、小山智士さん（六三）の名刺には「国連事務総長」「そやんか合衆国大統領特別顧問」などの肩書が並ぶ。農村問題の専門家で、「地域活性化には新しい発想が必要」と各地の自治体にミニ独立国の建国を働きかけている。

だが、その小山さんに「国連の名を勝手に使っている」という批判もあり、国連の方は事務総長就任を認めていない。一方、小山さんは「私はサミットで承認された。証拠のテープもある」と反論している。

ミニ独立国の先駆けとなった大分県宇佐市の「新耶馬合衆国建設公団総裁」の高橋宣宏さん（三六）は、最近、サミットに出ていない。「ショー化して、ムラおこしについて本音を語り合う場ではなくなった」

「ミニ独立国をつくったところで、過疎地の活性化は容易ではない。財政は厳しい。とてもサミットなんぞに出る余裕はありません」

◇

先月、鹿児島県・奄美大島の「奄美サンサン王国」は、独自にアイランド・サミットを開いた。海岸に面したホテルを会場に、十二単（ひとえ）のミスかぐや姫や、中国服の大臣など、民族衣装の各国首脳が集まった。

サミットの終わりに、各国は平和条約を結び、友好を誓った。

80カ国に招待状を出した。参加したのは九州、東京、京都などの16カ国。トカシク共和国からは「活動をやめました」との返事が来た=7月、鹿児島県・笠利町で開かれたアイランド・サミットで

両丹日日新聞

発行所
両丹日日新聞社
福知山市篠尾新町1丁目
☎22-2688 代表
ファックス 22-3232
振替口座 京都5-42028

秋田県のカエル村で

No.63